

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	IV 総括：3.須恵器
Author(s)	仁平, 典明
Citation	茨城大学考古学研究会報告(2): 65-67
Issue Date	1976-11
URL	http://hdl.handle.net/10109/8169
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

3. 須恵器

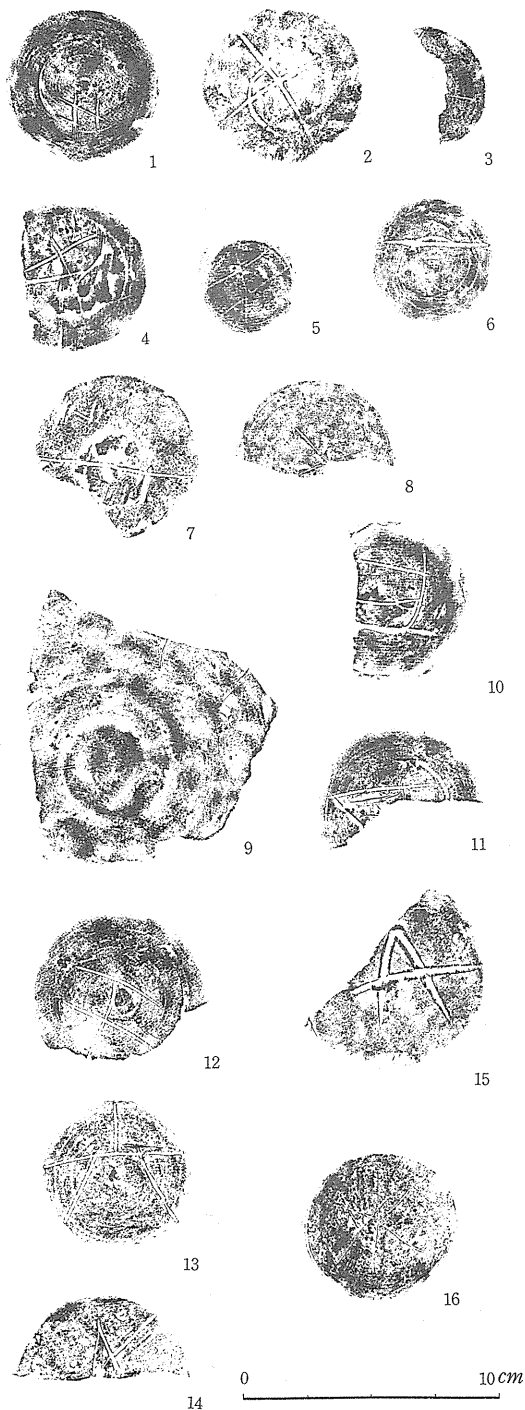
須恵器の表面採集による結果から、堂地内、堀西原、アラヤ、長者山、渡里、文京の各遺跡を眺めてみると、全体の約90%が堂地内、堀西原、渡里の3遺跡から採集され、そのうち堂地内遺跡では約40%、堀西原遺跡では約35%、渡里遺跡では約15%採集され、残りの遺跡においては余り採集されず、上記の3遺跡に極端な片寄りがみられた。

器種は、坏形土器、皿形土器、蓋形土器、壺形土器、甕形土器等があり、硯もみられた。各遺跡による器種の片寄りはいみられなかったが、一般に坏形土器、皿形土器、蓋形土器は、多数採集された。

この中で、特に注目されるものとして、堀西原遺跡において採集された円面硯と台付坏を再利用して使用したとおもわれる硯があげられる。前者の脚部には、短冊形の透孔が等間隔に施されており、裏面には暗緑色の釉が全体に塗られている。硯の面には使用したとおもわれる墨の痕跡が若干みられ、その面は余りすり減っておらず、長期間の使用は認められない。後者の内面は、全体に渡って墨が付着しており、坏の体部にも若干の墨が付着している。それゆえ黒色土師器のような使用の仕方は、高温で焼かれているために吸水性の少ない須恵器には考えられず、明らかに、台付坏を再利用して硯として使用したと思われる。

壺形土器や甕形土器においては、大形のため全形をうかがえるものは、ほとんどみられなかった。

胎土については、坏形土器、皿形土器、蓋



1 ~ 7, 16	5273	堂地内遺跡
8 ~ 11	5271	堀西原遺跡
12 ~ 14	5161	渡里遺跡
15	5472	文京遺跡

ヘラ書き、刻書拓影図

形土器とも、砂礫が含まれており、長石や石英は、ほとんど含まれておらず、壺形土器は、非常によく精選されているが、甕形土器は、小礫などが含まれ、一般的に粒子が荒い。

焼成については、ほとんどのものは須恵質であるが、半還元焼成とおもわれる赤橙色のものや、低温で焼いたとおもわれる赤茶色のものも一部みられた。

表面採集の点から考察すると、堂地内遺跡、堀西原遺跡、渡里遺跡の3遺跡は、他の遺跡と比べ、多量に土器が採集されているという見地から、須恵器を使用していた時代において、多くの人間が生活し、生活活動の場として、中心地として、繁栄していたと推測される。

坏形土器は、製作手法上から、底部に㊸回転ヘラ切り痕をそのまま残すものと、㊹回転ヘラ切り後、再調整されているものとに大別され、㊹はさらに、㊸単にヘラ調整されているものと、㊹回転ヘラ調整されているものに細分される。ほとんどのものは、㊸回転ヘラ切り痕をそのまま残しており、㊹回転ヘラ切り後、再調整されているものは、あまりみられなかった。回転ヘラ切り後の再調整は、回転ヘラ切りでロクロから切り離すと、回転糸切りのようにきれいに底部を切り離せず、底部に螺旋状にヘラ切り痕が残ったり、粘土がはみ出したりするので、それを整形するために施した^①とおもわれる回転糸切り痕が認められるものは、全くなかった。ロクロの回転方向は、時計と反対回り(左回り)のものと時計回りのものが認められ、左回りのろくろを使用していたものと右回りのろくろを使用していたものとの比は同じ位であった。このような傾向は、皿形土器にも共通するものとして理解できる。

ヘラ記号をもつ須恵器は、全部で15片採集され、堀西原遺跡で7片、渡里遺跡で3片、文京遺跡では1片採集され、それらの器形は、ほとんど坏形土器、皿形土器に限られ、堀西原遺跡にて、蓋形土器の内側にヘラ書きらしいものが刻まれたものや、甕形土器に刻まれたものが採集され、記号の種類は「一」が5片、「井」が1個体、「X」が2個体、「A」が1個体、「六」が1個体、「キ」が3個体、「ヨ」が1個体、「Y」が1個体認められ、同じ種類のものあまりみられず、バラエティに富んでおり、同時代であるとすれば、多くの陶工の存在が考えられる。ヘラ記号については、各窯別に意識的に使われ、「カマ印」とする説が従来において考えられてきたが、その説は、久永春男、田辺昭三、大川清の諸氏によって否定され、その用途や性格などに関する定説はないようであり、生産者が成形、乾燥、窯詰、焼成過程での仕訳けや識別の便宜をはかるために使われた^②と考えられている。特異なものとして、堂地内遺跡で採集された、体部の一部と口縁部が破損している壺形土器の底部にヘラ書きが施されているものがあげられる。ヘラ書きの文字は「東」らしいが、この文字について、仕訳けや識別の便宜のために書かれた記号と考えるのにはあまりにも困難性がともなう。それゆえ、それ以外の事を意図しているものであろう。

須恵器を焼いた窯については、木葉下町の窯から出土したものに同一記号のものがみられる^③ので、須恵器の焼かれた窯は、これらの遺跡の北北西約8kmのところと位置する水戸市木葉下町

の窯と、これらの遺跡の北西に位置する田野の窯で製造され、これらの地域に運ばれたものと推定される。

胴部全体に灰釉が塗られた坏形土器が1片、堀西原遺跡から採集された。従来、灰釉陶器の製作は10世紀に入ってからといわれている^④ので、この坏が製作されたのは、10世紀以降になってからと思われる。その他に自然釉が付着している坏形土器、壺形土器、甕形土器が数片採集された。

(仁平 典明)

註記

- 1) 『前内出窯址発掘調査報告書』 埼玉県遺跡調査会(1974)
- 2) 『陶邑 堺市泉北ニュータウン内泉ヶ丘地区埋蔵文化財発掘調査概要』 大阪文化財センター(1973)
- 3) 『水戸市史 上巻』(1963)
- 4) 『日本の考古学 IV』「窯業」 樽崎 彰一

4. 瓦

大学周辺における布目瓦の分布は、長者山、観音堂山、台渡廃寺跡を中心として渡里遺跡、堂地内遺跡、堀西原遺跡において見られるが、特に観音堂山付近にて圧倒的の多量の分布が見られる。台渡廃寺は8世紀前半頃に建立された古代那賀郡の郡寺としての性格を持っていた寺院であるらしく、数次の発掘の末に法隆寺式の伽藍配置^①であることも確認されている。

那珂川の対岸で豊富に布目瓦を出土する田谷廃寺址との関係などが問題とされている。

今回報告の資料中、注目されるべきことの一つは、台渡廃寺軒丸瓦第XIII式素縁重弁花文式軒丸瓦^②片と思われるものが、堂地内遺跡より採集されたことである。同様の軒丸瓦はこれまでに長者山付近から破片が数片出土していたにすぎないが、長者山付近から500m以上も離れた堂地内遺跡からの採集は注目される。なお、素縁重弁花文式軒丸瓦に関しては東北地方の多賀城、陸奥国分寺などに見られるものと同系統のもので、高井悌三郎氏によって、東北地方と当地方の関係^③が指摘されている。

堂地内遺跡からは、他にも丸瓦片、平瓦片が採集されている。この遺跡は台渡廃寺の瓦窯の役割を果たした木葉下町窯址群と台渡廃寺とを結ぶ瓦の運搬路上にあたっていると思われることより、布目瓦の散布が理由付けられる。この窯址と台渡廃寺を結ぶ一点にあたる開江町永代トヤ遺跡においても布目瓦の散布が見られる^④。こういった例は石岡市の常陸国分寺跡とその瓦窯である八郷町の瓦塚窯跡までの間にも見られ、点々と存在する瓦の出土する遺跡は瓦運搬路とみられている。

堂地内遺跡の布目瓦に関しては、丸瓦片の両面に焼土が付着しているもの、凹面が黒く焼け